
ぬけがらへびのガラガ

菜種油

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ぬけがらへびのガラガ

【コード】

N30201

【作者名】

菜種油

【あらすじ】

さらさら川に住むちいちいネズミは、しっぱの短い茶色のネズミ。今から、なかよしのあまガエルのところに出かけてゆくところなのです。

【漢字の読み対象年齢：小学三年生以上】

ぬげがらへびのガラガ

まつ 赤なお日さまが、山の向こうにしずむころ。

草のかけからあらわれたのは、一ぴきのちいちいネズミ。

ちいちいネズミは、ながあくのびた草のトンネルをくぐってくぐって鼻をくんくん、ひげをぴくぴく、草をかさかさ、地面をとっとどこまでも走ってゆきます。

ちいちいネズミは茶色のネズミ。しっぽはちょっと短いけれど、いっつも

ぴんとかっこよく立っています。

ちいちいネズミはつい三日前、お母さんとくらすネズミのすあなからひとり立ちして、お気に入りのお家のさらさら川に自分のすあなを作ったばかりなのです。

ようやくあなの中がきれいにかたづいたので、今日は、はじめてのお客

さまをよぶことになっていました。

いっとうはじめによぶやくそくをしていたのは、なかよしのあまがエルです。

あまがエルは、ちいちいネズミと同じ、さらさら川に住んでいます。

あまがエルはハスの葉っぱの上に、ちいちいネズミは土手の草むらにか

くされた、土の中のネズミあなでくらししています。

二ひきはさらさら川の住人の中でも、とくべつになかよしなのです。とつとつ走るちいちいネズミは、あまガエルの住む、ハスの葉っぱにど

んどん近づいてゆきました。

「おーい、あまガール。いるかーい？」

「た、たすけてくれえ〜」

おや？ あまガエルの声がするじゃあ、ありませんか。

いつも元気なあまガエルが、あんなになさけない声を出しているなんて、

いったい何があったのでしょうか？

なかよしのあまガエルの一大事。のんびりしているわけにはゆきません。

ちいちいネズミは急いで急いで、声の聞こえたほうにぐんぐんとかけ足

で近づいてゆきました。

さらさら川のそばの、大きな石の近くまで来たときでした。

石の向こうで、あまガエルが足を広げ地面にぺったりとすわりこんでい

るのを見つけたとたん、ちいちいネズミもピタリと足を止めてしまいま

しました。

あまガエルの目の前には、大きなへびのガラガのすがたがあったのです。

大きな口をぱっくり開けて、冷たい目はららんと光っています。

長い体はすきとおってぴかぴか光り、あのおそろしいしまもようも・

「あれね？」

ちいちいネズミは、なんだかガラガの様子がおかしいことに気がつき
ました。

「なあんだ。あっははは！」

「な、なにわらってんだい！　ちいちい、助けてくれよう！！！」

大きな黒目になみだをいっばいにためて、あまガエルがさげびまし
た。

「いいかい、あまガエル。落ち着いて、ガラガをよく見てもらんよ」

「だだだ、だってさっきからぼくをずっとにらんでいて・・・あれね
？」

そういえばそういえば。

このガラガは、いつもなら頭をゆらして、ニタニタといじわるくわ
らう

のに、今日はちっとも動かないのです。

シュルシュルとうねる長い体も、ガラガラといやあな音を立てるボ
コボ

コしっぽも、まるで石になったようにかたまったままでした。

ぽっこり頭にぺたんこ体のガラガのしまもようの向こうに、土や草
がう

つすらとすけて見えています。

ちいちいネズミはこしを抜かして立てなくなっているあまガエルを、

よ
いしょと助け起こして、二ひきはほんの少しだけ、ガラガのそばに
近づ

きました。

「ほらほら、ほらね？ これは、ガラガがだっぴしたぬけがらだよ。
ほ

んもののガラガじゃないでしょう？」

「なあんだ、なんだ。ぼくはもういよいよだめかと思ったよう」

はああ。と、自分の体よりも大きなためいきをついたあまガエルは、
よ

うやくもとどおりになった自分のこしをぴよこりと前足でなでつけ
ると、

動かないガラガのぬけがらに、ぴよこぴよこと近づいてゆきました。

「わあ、大きな口だなあ。ぼくやちいちいを丸のみにしちまっわけ
だよ。

ねえねえ、見てよ。この長いキバ！」

「どくがのこっているかも知れないから、さわらない方がいいよ。
早く他のみんなにもガラガが近くにいて知らせてあげなくちゃ」

ちいちいネズミのことばに、あまガエルはぴよこんとのけぞりまし
た。

「おいおい、待ってよ。ちいちい！ きみ、こんなにすてきなおく

りも
のを、むだにしちまう気なのかい？」

「すてきなおくりもの？ そんなものがいったいどこにあるんだい？」

辺りをきよろきよろと見たすちいちいネズミのすがたに、あまガエル
は大声でわらいました。

「いやだなあ。ちいちいったら、これだよ、こーれ！」

あまガエルは丸っこい指先で、ちょんちょんとガラガのぬけがらを
つつ
きました。

「こりゃあ、もしかしたらぼくらにとって、とんでもないお守りにな
る
かも知れないよ？」

「どういうことだい？」

首をかしげるちいちいネズミに、あまガエルはとくいげな顔をしま
した。

「まあ、ぼくの考えを聞いてくれたまえよ。ちいちいくん。まずは、
こ
のガラガのぬけがらを、きみの家まで運ぶとしよう。ちょっとぼく
らに

は大きいけれど、中身はまるでからっぽだ。長い体はとちゅうでち

よん

切れば、きつとつまく運べるさ」

「これをぼくの家運んで、いったい、どうするつもりなんだい？」

「しつもんは後にしてくれ。急がなきゃ、だれかに見つかつちまう。さあ、運ぶぞ。ちいちはそっちを持って。いくぞ、よいつしょ！」

ゆらりと、すきとおったガラガの頭が草地から持ちあがりました。

そのまま長い体をひきずって、ガラガの体が少しずつ少しずつ、前に進み始めます。

「よいつしょ！ よいつしょ！」

ガラガの頭が大きな石を曲がったとき、長い体が石に引っかかりました。

「いいぞ、ぼくのさくせんどおりだ。そのままつんと引っばってくれ！」

あまガエルの号れいで、二ひきはいつしょうけんめい力を出します。

「よーいしょー！ よーいしょー！」

ぶつんっ！

「わあー！」

大きな音がして、ふたりは草の中に転がりました。

「あいたたた・・・あれ？ あまガエルはどこだろう？」

したたかにおでこをぶつけてしまったちいちいネズミは、前足でおでこをさすりながら、あまガエルのすがたをさがしました。

「ここだよ、出してくれよう」

また、あまガエルのなさけない声がします。

ちいちいネズミは声のするほうをふりかえると、思わずふきだしました。

「やあ。きみ、ちょうどいいベッドを見つけたねえ」

あまガエルは、ガラガの大きな口の中に転がりこんだまま、こちらにお

しりを向けてじたばたともがいていました。

「ほらほら、だいじょうぶかい？」

やっとの思いで、ガラガの口の中からぬけ出したあまガエルは、ふたたび、はああ。と、自分の体よりも大きなためいきをつきました。

「たとえぬけがらとはいえ、へびの口に自分から転がりこむなんて気分のいいもんじゃないね。ぼくは今度こそだめかと思ったよう」

「あはは。きみがぶじでよかったよ。キバにはもう、どくものこつてい

ないみたいだね？」

「ああ、ぼくがきけんな目にあつたおかげで、こいつが安全なガラガだ
つてわかつたし、長い体もちょん切れた。さあ、もうひとぶんばりだ。
がんばろう」

「よしきた。ゆづ」

それから、ちいちネズミの新しいネズミあなまで、二ひきはひいひい
ふうふういいながら、ガラガの頭とちょん切れた短い体をひきずつてゆ
きました。

「やあ、もうこのあたりでいいだろう。ゆっくりと下ろしてくれ」

「はあ、ひい、ふう。さいしょは軽かったのに、ガラガの頭って重たい
んだねえ」

「へえ、ほう。はあ。もうぼくはくたくただよ。ちいち、お茶をいっ
ぱいごちそうしてくれるかい？」

「いいとも。きみはぼくの家のはじめてのお客さまだよ。おぶろに入っ
て、ごはんを食べよう。今日はとまってゆくといいよ」

「そりゃありがたい。すっかり体のどろがかわいちまって、ぼく

は動

きづらいったらなかったよ

「ところで、このガラガの頭はどうするんだい？」

ちいちいネズミのしつもんに、ぽっこりふくれたおなかのかわいた
どろ

をペリペリとはがしながら、あまガエルは答えました。

「どうするのは、これからの楽しみさ。さてと、今日はもう
まっ

暗だし、こいつはここにおいといて、のこりはまた明日にしよう。

ごは

んといえは、すっかりおなかがぺこぺこだ

「そうだね。ぼくらがねている間にだれかがこれを見つけて、びっ
くり

しなきゃいいけれど」

ガラガの頭をのこしたまま、二ひきはネズミあなのおくへと入って
ゆき

ました。

まっ白なお日さまが、草についた朝つゆをキラキラとてらしていま
す。

川から流れてくるもやの中を、一ぴきのネズミがちいちいネズミの
すあ

なへと向かっています。

「ちいちいのお家は、そろそろきれいになったかな？」

やって来たのは、同じさらさら川に住むごきんじょネズミでした。ちいちいのひっこし祝いに、おくりものを持ってきたのです。いつものだんだん岩をめじるしに、岩をくると曲がったとたん、ごきんじょネズミは大きなひめいを上げました。

「わあ！へびだ！！」

ちいちいネズミのネズミあなに向かって、大きなへびが口を開けて待ち

かまえているのです。朝もやにぼんやりとかくれています。たしかに

あれはずるがしこくて、らんぼう者だとゆうめいな、ガラガのすがたに

ちがいありません。

もしガラガに見つかってしまったら、自分もすぐに食べられてしまうので

しょう。

ちいちいの身がしんぱいでしたが、自分のいのちも大切です。

ガラガに見つからないうちに、ごきんじょネズミはすばやくちよるりと

にげ出してゆきました。

朝もやが、少しずつはれてゆきます。

やがて朝もやが消えて、まっ白なお日さまがさんさんとふりそそぎ始め

たころ、ちいちいのネズミあなから、あまガエルがぴよこんと顔を出し

ました。

「ふわあ〜・・・わあ！！へびだ！！！」

あくびをしかけていたあまガエルは、大あわてでネズミのあなにに
げこ

もうとして、ポヨンと自分のおなかをたたきました。

「おとつと。しまったしまった。あいつはぼくらのお守りだった
んだ

つけ。さてさて、いろいろそがしくなるぞ。ちいちいを起こして
来な
くちや
」

あまガエルはつきつきしながら、ネズミあなをびよこんびよこんと
下っ

てゆきました。

「いいかい。ちいちい、これからぼくときみとで、ガラガにお守り
にな
ってもらうんだ」

「お守りって、ぼくにはよくわからないよ、あまガエル。どうゆう
こと
だい？」

「まあまあ、ぼくにまかせておけば、きみはずっと安心してこの新
しい
すてきなあなでくらせるはずさ。まずはペンキを使うんだ」

「ぼくの家をぬるのにのこっていたペンキだろう？　これをなにに使うんだい？」

「いいかい、ちいちい。色を見てごらんよ。白と黒。茶色もあるだろう？」

これはなんの色なのか、思い出してみよ

「ぼくの家のかべと・・・ああ！　そうか！！　ガラガの色だね？」

「ごめいとう。さすがはちいちいネズミの大だんなさまだ。さあ、さっ

そく色づけを始めよう。ほんもののガラガみたいに、そっくりな色でぬ

るんだよ。ぼくが頭によじのぼるから、きみはあごからぬってくれ。

□

の中もていねいにぬってくれよ？　だいじなところだからね

「うーん。昨日のきみのことばじゃないけど、自分から進んでガラガの

口に入るのは、こいつに食べられるみたいであんまりいい気はしないな

あ。なんだか体の毛がさかだつよ。しっぽもぴりぴりするし」

短いしっぽを気にしながら、ちいちいネズミはガラガの口の中にもぐり

こんで、白に少し茶色を混ぜたペンキをペタリペタリとぬりました。

「ぼくらがこんなにガラガの近くにいたことなんて、ありえないこ

とだ
ものね。たいていは見つかったらその場でペロリさ。こわがってる
ひま
もないよ。おっと、頭のもようを少しかえておこつかな？」

「どうしてだい？」

ガラガの口から出てきたちいちいネズミに向かって、あまガエルは
自分
の丸っこい指を一本立てて言いました。

「だって、ほんもののガラガがもしここに来たら、ちがうへびじゃ
なく
て、自分のぬけがらだってわかっちゃうよ。体はちよん切っておい
てき
ちまったから、せめて頭だけでもくふうしなくちゃ」

そういうと、あまガエルはしんけんそのものの顔で、ゆっくりとガ
ラガ
の頭のとっぺんに、今までとはちがうしまもようをえがきました。

こうして、お日さまがかたむくころ、ようやくとガラガの頭のお色
直し
ができあがりました。頭も目玉も、まるで生きているようにほんも
のそ

つくりです。暗くなりかけた草むらの中では、ガラガのかけが地面
に大
きくのびて、つい先ほどまでペンキをぬりつづけていた、ちいちい
ネズ

ミとあまガエルまで、なんだか体がぶるぶるとふるえてきました。

「ぼくたちまでふるえちゃうほど、よくできているよ。これでもう、きみのすあなにもぐりこんで、きみを食べようとするへびもイタチもこいつをこわがってここには来ない。これがぼくの考えた、きみへのひっこしいわいだよ。それにこれは、ぼくにとってもお守りになる。どうだい？」

「あまガエル、きみってすごいよ！　なんてすてきなおくりものなんだろっ！」

「きみがよろこんでくれて、ぼくもうれしいよ。さあ、ちょん切った体は土にうめて、葉っぱでかくそう。そうすればもっかんぺきだよ」

こうして、ちいちいネズミとあまガエルは、とても強力なお守りを手に入れたのです。

ごきんじよネズミたちはみな、このとんでもない“お守り”にびっくきょうてんして、ちいちいネズミの新しいお家には来たがりませんでした。そんななかまたちに、ちいちいネズミとあまガエルがこれまでのいきさ

つをとくいになってせつめいすると、ごきんじよネズミやあまガエ

ルの
友だちも、おそろおそろぬけがらへびのガラガに近づいてくるよう
にな
りました。

こうして今ではすっかり、ガラガの頭はみんなの遊び場になってい
ます。
かたいぬけがらに、ペンキをすっかりぬったおかげで、雨がふって
も風
がふいても、ほんものそっくりなガラガの頭は、いつまでたっても
じよ
うぶなままでした。

ちいちいネズミとあまガエルでこしらえた、ぬけがらへびのガラガ
のひ
みつは、ちいちいネズミの家にやってくる、小さな動物たちみんな
の大
きなひみつになってゆきました。

こんなふうに、雨がふり、風がふくうちに、ガラガの体のあちこち
には
コケが生えました。ガラガの頭はすてきな黄色のわたぼうしをかぶ
った
ように、体はまるでりっぱな緑色のコートをはおったようにふかふ
かと
しています。

「やあ、なかなかおしゃれじゃないか。ぬけがらへびのガラガくん」
あまガエルのきどったあいさつにも、ぬけがらへびのガラガは動き

ませ
ん。このころには、ネズミやカエルはみんなみんな、すっかりガラガラの
口の中に入ってもへっちららになっていました。

「どうだい？　ぼくらのお守りはたいしたごりやくじゃないか。モズも
イタチもキツネも他のへびも、一度こいつを見かけたら、二度とこ
の家
には近づかない。おかげでぼくらのくらしはあんたいさ」

ちいちいネズミもあまガエルのまねをして、気どっていいました。

そんなある日、ちいちいネズミがすあなの中でねむっていると、大
きな
じしんがありました。土の中のトンネルがぐわんぐわんとゆれてい
ます。
ちいちいネズミはあわててとびおきました。

「たいへん！　家がくずれちゃう！」

ところが、すあなの出入り口をめざして走っても走ってもまったく
足が
進まないのです。じしんはどんどん大きくなって、ちいちいネズミ
の頭
の上に、土のかたまりがばらばらとふりかかってきました。

「わああー！」

がばっと、ちいちいネズミは自分のねどこからはねおきました。

そうです。大きなじしんはちいちいネズミの見たゆめだったのです。いえいえ。もしかしたらじしんは、本当にあったのかもしれない。だって、かべにかけてあったすてきなぼうしもかばんも、みんなちいち

いネズミの足もとにすべり落ちていたからです。

ちいちいネズミはねほけまなこでぼんやりと、家の中を見わたしました。

「ぼくはじしんのゆめを見たのかなあ？」

ちいちいネズミはすあなの出口まで、とつとつとつと、ようすを見にゆきました。

ネズミあなの出入り口は、空をとぶモズからも、地上を走るイタチから
もキツネからも見つからないように、上手に草でかくしてあります。ふさふさとした草のれんをおしわけて、ちいちいネズミはそつと家から顔を出しました。

「だんだん岩もくずれていないし、やっぱりゆめだったのかしら？」
じつと暗やみを見めていたちいちいネズミは、ふと、ガラガのようすが
おかしいことに気がつきました。

「あれ？ あれれ？」

大きく開いていたはずのガラガの口が、今はぴったりとじているので
す。黄色や緑色をしたコケのコートやぼうしも、先ほどの大きなじ
しん
でガラガの頭や体から、みんなすべり落ちてしまっていました。

「ああ、なんてことだ。ガラガの体がつぶれちゃったら、ぼくらの
安心

なくらしもおしまいだ。こいつにはぼくらのお守りとして、もっと
もっ

と役に立つてもらわなくっちゃならないんだから」

ちいちいネズミのことばにも、ぬけがらへびのガラガはじっとだま
って

います。

「ふわあーあ。家のようすもだいじょうぶだし、ぼくはもうひとね
むり

するでしょう。しっかりキツネとイタチとへびをみはってるよ。だ
んま

りへびのぬけがらガラガ！」

ねむそうな大あくびをして、ちいちいネズミは家の中に入ってゆき
まし
た。

草むらがまたしずかになったころ、とつぜん、やみの中に、ぱちり
とふ

しぎなふたつの光があらわれました。

ぎよろり、ぎよろりとふしぎな光が動いています。
やがて、ふたつの光のそばで、シュルシュルと音がしました。

「しめしめ。みごとにさくせんせいこうだ！」

そう、だれかがつぶやく声が出て、ふしぎなふたつの光はすつと消え

てしまいました。

そしてまた、まぶしい朝がやってきました。

だれかが道の向こうから、ぴよこんぴよこんとびはねながらやってくる

きます。

両の手に、たくさんの木の実や虫をかかえながらやってきたのは、あま
ガエルでした。

「こんなすてきな朝だもの。ちいちいといっしょに朝ごはんにしよ
う。」

とりあえず、にもつはガラガの口の中に入れておこう

あまガエルは、あいかわらずにぱっくりと大きく口を開けているガ
ラガ

の口の中に、かかえていた木の实や虫をばいばいばいと放り投げる
と、

ガラガのとなりの、ちいちいネズミのすあなに向かってよびかけま
した。

「おっい。ちいちい、もう朝だよ！ ごはんにしよう！ おきて！

お
きてー!」

しばらくすると、すあなのおくからちいちいネズミが目をごすりながら出てきました。

「やあ、あまガエル。おはよう。今日も元気だねえ」

「おや? きみはずいぶんとねむたそうじゃないか。どうしたんだい?」

おおあくびをしているちいちいネズミの顔を見て、あまガエルはわらいました。

「なんだかねえ、ゆうべのじしんの後で、ぼくはいやあなゆめを見たん
だよ」

「じしん? ゆうべはじしんなんか、なかったよ? それに、いやあな
ゆめって、どんなゆめだい?」

首をかしげているあまガエルに、ちいちいネズミはあくびをくりかえし
ました。

「なにいつてんだい。あんなにぐわんぐわんゆれてたじゃないか。
きみ

んちは、川の中のハスのはっぱの上だから、きつとなにも感じなかったよ。きみはいいよね。水の中だつてとくだもの。ぼくはずつと、水草に足を取られて、おぼれるゆめを見ていたつていうのにな」

ねぶそくでちよつとふきげんなちいネズミは、ガラガのすがたを見たとたんに目を丸くしました。

「あれえ?？」

「なんだい、こんどはどうしたんだい？」

「どうして、ガラガの口が開いているんだい？」

ちいちいネズミのことばに、あまガエルはまたわらいました。

「いやだなあ。ちいちい、いったいどうしちゃったのさ? ガラガの口は、いつも大きく開いているじゃないか」

「そうじゃないんだよ、あまガエル。きのうの大きなじしんのせいで、ガラガの口はとじていたはずなんだ。ぼくはちゃんとこの目で見たんだもの。そのしょうこに、コケもぜんぶ体からすべり落ちているだろう?？」

ちいちいネズミのことばに、あまガエルはうでぐみをして、ガラガ

の体
を見上げました。

「うん。たしかに体のしまもようは、はっきり見えているけどねえ。

ぼくはまったく気がつかなかったけど、きみのいう、その大きなじしんとやらで、コケがはがれちゃっただけじゃないかい？ あいつの体は前

と同じで土にうまつちまっているし、あの大きな口だってさっきぼくが来たときにも、かわらずに開いていたよ？ 持ってきたごはんはみんな

あいつの口の中においてある。さあ、朝ごはんを食べながら、きみの見たいやあなゆめのことも、ゆっくり考えるところじゃないか」

「うん。きみがそういうのなら、あのじしんも、ぼくが見たいやあな

ゆめの中のできごとだったのかも知れないなあ」

ちいちいネズミはふしぎがって首をかしげながら、あまガエルといっし

よに、おおきく開いたガラガの口の中に入りこんで、二ひきはこしを下ろしました。

「やあ、あまガエル。口の中をきれいにそうじしてくれたのかい？」

「いいや。ぼくはそうじなんてしていないよ？ さあ、ごはんにし

よう」

二ひきはガラガの口の中にすわりこんだまま、木の実や虫を手に取りました。

ぼとり。ぴちゅん。

「ひゃあ！ なんだい？ 雨もりかい？」

とつぜん頭に水のしずくがいくつも落ちてきて、あまガエルはとびあがり泣きました。

「雨もりだなんて、ゆうべは雨なんかふっていなかったよ？ ひゃあ！」

ガラガの口のでんじょうを見上げたちいちいネズミの顔にも、雨のようになしずくがふってきました。

そのときです。

ぱくっ！！

おおきな音がして、二ひきの目の前はまっ暗になりました。

「なんだい？？ なにがおこったんだい??？」

目をぱちくりさせているちいちいネズミに、あまガエルはさげびま

した。

「たいへんだ！　ちいちい！　ぼくらはこいつにとじこめられたんだ！

ぼくにもよくわからないけど、早くここからにげなくちゃ！」

二ひきはあわてて立ち上がると、持っていた木の実や虫を放り出して、

まっ暗なガラガの口からにげだそうといっしょうけんめいガラガのキバ

をたたきました。

ぐらり！　ぐらぐらっ！

とつぜん足もとが大きくゆれて、ちいちいネズミとあまガエルはその場に転がってしまいました。そしてそのまま、二ひきの体はごろん

ろん

と、ガラガの体の中のトンネルを転がり落ちてゆきました。

「あっははは！　おれさまの口に自分から入ってくるなんて、こわいも

の知らずなネズミとカエルだな！」

転がり落ちた先のせまい部屋のような場所で、ようやくおきあがった

いちいネズミとあまガエルは、かみなりのようなその声を聞いてふるえ

あがりました！

「ガラガの声だ！… どうしてガラガの声がするんだい！？」

「どうしてって、そりゃあ決まっているだろう。おまえさんたちは今、

おれさまのいぶくろの中においでだからさ」

しゆるしゆると音を立てて、ガラガの体が動き始めました。

まっ青な顔をした、ちいちいネズミとあまガエルは、おたがいにひしと

だき合つて、顔を見合わせました。

「いぶくろって、じゃあ、ぼくらはおまえに食べられちゃったのかい？」

ちいちいネズミのさげび声に、いじわるなガラガの声がひびいてきます。

「まあそついうことだ。おまえさんたちは自分から、おれさまの口に入

つてきたんだろう？ せつかくの食べ物はありがたくいただかないと、

バチが当たるってもんだ。せいぜいゆっくりとしていってくれ」

楽しそうにわらうガラガの声に、あまガエルは泣き出しました。

「なんてこつた！… おねがいだ！ ガラガ！ ぼくらをここから出し

てくれよう！…！」

「そつだよ！ ぼくらはきみに、なんにも悪いことはしていないじゃ

ない
か!」

ちいちゃんネズミがそうさげぶと、ガラガはびたりと体の動きを止めた。
まし
た。

「おれさまだつて、べつに悪いことをしたわけじゃない。おれさまはた
だ、おまえさんたちと同じことをしたまでさ」

「同じこと? ぼくらがいつたいなにをしたつていうんだい?」

「そつだよ! ねえ! 出してくれよう!」

二ひきの足もとは、ガラガのいぶくろから出てくる消化えきがたまり始めています。足もとの木の実が少しずつとけ始めたのを見て、ちいちゃんネズミとあまガエルはふるえ上がりました。

「じゃあ、はらごなしにゆっくりとせつめいしてやろう。おまえさんた
んた

ちは、おれさまのだっぴしたぬけがらをりようして、自分たちをね
らう

モズやイタチやキツネや他のへびどもから身を守っていたんだらう
?

あいつらはいつも、おれさまのことをおそれているからな。ぜった
いに

近づいてこない。つまり、おまえさんたちはおれさまの力をりよう
した
のさ
「

「わかった！ わかったから早く出して！！」

「ぼくら、このままじゃ死んじゃうよう！！」

ちいちいネズミとあまガエルのさげび声はどんどん高くなってゆきます。

ガラガはとてもまんぞくそうにわらって、しっぽを細かくふるわせました。

「まあ、そんなにあわてなさんな。それだけじゃない、どういうわけか、

おまえさんたちはそのうちおれさまのことも、全くおそれなくなつた。

ネズミやカエルが平気でおれさまのぬげがらの口の中に入り、のんきに

木の実なんかかじってるのを見たときは、さすがのおれさまもあきれたぞ」

ガラガラといやあな音がひびいてきます。

どこかとおくで、ちいちいネズミとあまガエルのひめいがあがり、いじ

わるなガラガの楽しげな声はさらにつづきました。

「そこでだ。じゃあ、おれさまも同じことをさせてもらおうと思つたの

さ。今までさんざんおれさまのぬげがらをりようしてきたおまえたちか

ら、少しくらいお礼をもらってもいいじゃないか？ わざわざ動きまわってエサをさがさなくても、エサが自分から口の中にとびこんでくるなんて、こんなに楽な話はないからな。このお礼はありがたく使わせても
らうよ・・おい？ 聞いているのか？」

ガラガの体の中からは、もうなんの音も聞こえてはきませんでした。「なんだ。もうとけてなくなっちゃったのか。ちびっこいネズミとカエ
ルじゃ、はらの足しにもならないな。さてと、こいつをどうするか・
そうだ！」

自分の体の向こうにおしやっていた、ぬけがらへびのガラガをながめていたほんものガラガは、自分の体でぬけがらへびのガラガを道のま
ん中
までおして運んでゆくと、自分は草むらの中にこっそりとかくれま
した。

しばらくすると、ごきんじょネズミが道の向こうからやってきまし
た。

「あれ、こんなところにちいちいの家の、ぬけがらガラガが落ちて
いる
ぞ？ ちいちいはどうしたのかな？」

ごきんじよネズミはちいちネズミのすあなまでたずねてゆき、すあなの外からよびかけました。

「おつい、ちいちい！ いるのかーい？」

ちいちいネズミの返事はなく、すあなの様子もしずまりかえっていません。

「おかしいなあ、あまガエルも自分の家にはいなかったし、いつしよに旅にでも出たのかなあ？」

首をかしげたごきんじよネズミは、やがていいことを思いつきました。

「じゃあ、ちいちいが出かけている間だけ、ぼくがあぬけがらガラガのお守りを使わせてもらうとしよう。ちいちいとあまガエルが帰るときたら、もどせばいいや。あのお守りは強力だから、これでぼくもしばらくの間はモズやイタチやキツネやへびから、ねらわれる生活ともおさらばだー！」

ごきんじよネズミは大よろこびで、さつそくなかまのネズミをよびに、もと来た道を走ってもどってゆきました。

やがて、「ごきんじょネズミとともに、数ひきのネズミがもどつてきまし
た。ネズミたちはわいわいがやがやとさわぎながら、ぬけがらへび
のガ
ラガの体を自分たちの楽しいすあなに運んでゆきます。

そのすがたが小さくなったころ、草むらでほんものガラガのふたつ
の目
玉がぴかりと光り、しゅるしゅるガラガラと音をたてながら、ネズ
ミた
ちのあとをしずかに追いかけてゆきました。

「まさか自分のぬけがらに、こんなにいい使い道があるとはな。お
れさ
まにとつてもいいお守りだ。ありがたく使わせてもらつとしよう。
これ
で当分は、おれさまもはらっぱい食べられるだろう」

楽しそうにわらうガラガのすがたは、やがてだんだん岩のむこうへ
と消
えてゆきました。

さてさて。ガラガのさくせんはうまくいったのでしょうか？
みなさんも、どこかでへびのぬけがらをみつけたら、その体がペン
キで

きれいにぬられていないかどうか、そつとたしかめてみてください。
そのときには、草むらのかげでふしぎなふたつの光がぴかりぴかり
と光
つていないか、どうかひとつご用心を。

おしま

(後書き)

お読みくださり、どうもありがとうございます(^ ^)
(^ ^)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3020i/>

ぬけがらへびのガラガ

2010年10月14日14時03分発行